

## 現代青年の友人関係における主観的ウェルビーイング

— 共感性、怒りの特性および表出傾向との関連 —<sup>1)</sup>

鈴木 有美<sup>2)</sup>

### 問題と目的

Seligman & Csikszentmihalyi (2000) は、これまでの心理学研究が、損なわれた心的機能の治療という観点から、ネガティブな病理的側面に偏りすぎていたことを指摘し、今後もっと健康な心的機能の維持や才能・資質を伸ばすといった観点から、ポジティブな経験・ポジティブな特性・ポジティブな社会的活動などに焦点を当てる「Positive Psychology」の必要性を提言している。その指標のひとつとして注目を集めているのが、「主観的ウェルビーイング (Subjective Well-Being: SWB)」である (Diener, 2000)<sup>3)</sup>。主観的ウェルビーイングは、「個人生活の自分自身の評価」と定義され、認知的および情緒的側面によって分類されている概念である (Diener, 1984; Diener, Suh, Lucas, & Smith, 1999参照)。具体的には、認知的側面として“全体的な生活満足感”と“特定の重要な領域における満足感”，情緒的側面として“快感情（ポジティブな感情経験が多いこと）”と“不快感情（ネガティブな感情経験が少

ないこと）”の4つの基本的要素からなる。

鈴木 (2002) は、青年期における精神的健康研究において、健全な情緒発達や社会性を背景とした社会的適応の観点からも検討を進めるこの意義を述べ、従来の尺度の問題点を指摘し、青年期における主観的ウェルビーイングの多次元的な様相把握を可能にするための尺度改良を行い、共感性との関連を検討している。その結果、全般的生活満足感の高い者は快感情を、逆に低い者は不快感情を多く経験する傾向があること、さらに全般的な生活満足感の低い者ほど他者の意見や感情に影響されやすいことを見出した。また、友人関係満足感の高い者ほど他者の心理状態を正確に判断する能力があると認知しており、共感的な反応が多く、快感情経験が顕著であったことなどを報告している。それにより、特に友人関係が重要性を増す青年期においては、友人関係における満足感を考慮することが肝要であると結論づけた。

円滑な社会的相互作用に共感性が大きく影響することは、古くから論じられており (Davis, 1994; Eisenberg & Strayer, 1987参照)，向社会的行動や援助行動を促進する (Eisenberg & Miller, 1987参照) だけでなく、反社会的行動や攻撃行動を抑制する (Miller & Eisenberg, 1988参照) 要因でもあることが明らかとなっている。これまで共感性の定義は、「他者の心理状態を正確に判断する認知能力」という認知的理性的側面を強調する定義と、「他者の心理状態に対する代理的な情動反応」という情緒的反応の側面を強調する定義とに大別されてきたが、近年では両側面を統合し、多次元的に共感性を捉え直そうとする試みがなされている (Davis, 1980, 1983; 出口・斎藤, 1990; 鈴木・木野・出口(智)・遠山・出口(拓)・伊田・大谷・谷口・野田, 2000; 登張, 2003)。

ただし、現代青年に関しては、対人関係の希薄化により友人関係のあり方が変化したとの指摘がある。例えば、相手に働きかけないことがごく普通の接し方であったり (松井, 1990), 内面的な関わりを避けつつも表面的な楽しさを求めて群れる傾向がみられる (岡田, 1995)。さらに、小塩 (1998) は、表面的な友人関係を営んでいる

1) 本研究は、日本グループ・ダイナミックス学会第50回大会において発表された内容に加筆・修正したものである。

2) 名古屋大学大学院教育発達科学研究科研究生

3) Diener (1984; Diener, Suh, Lucas, & Smith, 1999) がそのレビュー論文の中で触れているように、SWB の研究は Wilson (1967) の主観的幸福感 (Avowed Happiness) のレビューに端を発しており、そのためか日本では SWB を「主観的幸福感」「主観的健康感」などと訳すことが多いように見受けられる (例えば、伊藤・相良・池田・川浦, 2003; 根建・田上, 1995; 藤南・園田・大野, 1995)。しかし、近似した概念であるハピネス (Happiness), 心理的ウェルビーイング (Psychological Well-Being), 生活の質 (Quality of Life) などとの混同を避けるために、本研究では「主観的ウェルビーイング」と表記する。

者は内面的な友人関係を営んでいる者より自己愛傾向が高いことを見出している。DSM-IV (APA, 1994)において自己愛は、「空想または行動における誇大性、賞賛されたいという欲求、共感の欠如の広範な様式」とされており、共感性の欠如が自己愛人格障害の診断基準のひとつとなっている。青年期特有の人格的特徴としての自己愛傾向は、病理として扱われる自己愛人格障害とは異なるものの、同様のタイプ分けが可能であるとの知見が提出されており（小塩, 2002; 清水・海塚, 2002）、一般的な青年期心性としての自己愛傾向の高さも共感性の欠如と関連し、延いては表面的な友人関係を営んでいる者ほど共感性が低い可能性がうかがえる。

木野・鈴木・速水（2000）は、他者の感情を理解し、適宜調整できることは、適応的な社会生活を営むために要求される能力であり、精神的健康を維持するためにも重要であるとの視点から、女子青年における友人関係に注目し、共感性や友人関係に対する態度、友人関係における満足感といった要因が、友人の不快感情調整にどのように関わるのかを検討している。その結果、共感性の高い者ほど無条件に友人の不快感情を調整しようとし、逆に、友人同士でも個人的領域には立ち入るべきではないという態度を有する者ほど友人の不快感情調整に躊躇する傾向が見出された。

また、自己の感情に関しても、感情経験、特にその開示をすることが精神的健康によい影響を与えるという視点に立つ研究者が増えているが（Pennebaker, 1995 参照）、社会的適応の観点から考えれば、時には対人関係における感情の調整、特に不快感情の調整が必要となる（Salovey & Mayer, 1990）。崔・新井（1998）は、円満な人間関係を築き精神的健康を維持するためには、不快感情表出の制御が重要となるが、現代青年の形式的な友人関係では、制御しそぎて満足感や充実感が得られないのではないかと仮定し、不快感情表出の制御を測定する尺度を作成し、友人関係満足感との関連を検討している。その結果、友人から言語による被害を受けた場面で生じた怒りを抑制することが、友人関係満足感にとって望ましくないことを見出している。

これらのことから、友人関係が重要性を増す青年期においては、主観的ウェルビーイング、特に友人関係における満足感や感情経験は、共感性と関連すると予想される。また、自己や他者の感情に注意を向け、特に不快感情については適宜調整できることは、主観的ウェルビーイングや共感性と深く関わると予想される。しかし、もし表面的な友人関係が現代青年の特徴であるとするならば、必ずしも主観的ウェルビーイングと共感性が一定の関連を示すとは限らない。さらに、共感性の低さから、

自己の不快感情を調整せずに他者にぶつけたり、他者の不快感情について気にとめなくとも、高い主観的ウェルビーイングを有するという可能性もある。

さらに、主観的ウェルビーイングも共感性も、気質や情動性の影響を受ける（Davis, 1994; Diener, Suh, Lucas, & Smith, 1999 参照）との指摘も考慮せねばならないだろう。例えば、特性的な怒りは、社会的・身体的・心理的ウェルビーイング（Mahon, Yarcheski, & Yarcheski, 2000）や生活満足感（Hong & Giannakopoulos, 1994）に与える影響が大きいことが明らかとなっている。主観的ウェルビーイングが不快感情経験の少なさを含む概念であることや、上述の崔・新井（1998）の研究において示された、怒りの抑制が友人関係満足感に与える影響も考え合わせると、本研究においても怒りの感情に注目することは有益であろうと考えられる。

したがって、本研究では、友人関係における主観的ウェルビーイングに注目し、共感性および怒りの表出傾向との関連を明らかにすることを目的とする。その際、特性的な怒りがこれらの関連に及ぼす影響を考慮する。さらに、主観的ウェルビーイングの高さや怒りの表出傾向の違いによって、共感性が異なるかどうかについても検討を行なうこととする。

## 方 法

### 被調査者および手続き

四年制大学に在籍する学生288名に対して質問紙調査を実施した。内訳は、男性137名、女性151名（平均19.83歳、標準偏差1.33歳）であった。調査は、各自が自宅へ持ち帰って回答し、1週間後に提出するという形式がとられた。

## 測 度

(1) 友人関係における主観的ウェルビーイング：認知的側面は、鈴木（2002）の生活満足感尺度の下位尺度である友人関係満足感尺度（特定の重要な領域における満足感のうち、友人関係領域に関するもの、6項目）を用いて、「1：全くあてはまらない」から「5：とてもよくあてはまる」までの5段階で評定を求めた。情緒的側面は、鈴木の感情経験尺度（快・不快感情各5項目、計10項目）を用いて、友人関係においてそれぞれ最近どの程度経験したかを「1：全く感じなかった」から「5：とても感じた」までの5段階で評定を求めた。

(2) 共感性：鈴木（2002）の多次元共感性尺度より、認知的側面の下位尺度である視点取得尺度（他者の心理状態をその者の視点に立って理解しようとする傾向、5

項目)と、情緒的側面の下位尺度である他者指向的情緒反応尺度(他者の心理状態に対する情緒反応傾向のうち、他者に焦点の当てられたもの、5項目)を用いて、「1：全くあてはまらない」から「5：とてもよくあてはまる」までの5段階で評定を求めた。

(3) 怒りの特性と怒りの表出傾向：鈴木・春木(1994)の邦訳による状態-特性怒り表出目録(State-Trait Anger Expression Inventory: STAXI; Spielberger, 1988)より、特性怒り尺度(パーソナリティ特性としての怒りやすさ、10項目)と怒り表出尺度(①怒りの表出：怒りを他者や物など外部へ向ける傾向、9項目、②怒りの抑制：怒りを内にためる傾向、8項目、③怒りの制御：怒りを静めたり行動を抑制する傾向、7項目、計24項目)を用いて、本来の4件法ではなく、特性的な怒りについては「1：全くあてはまらない」から「5：とてもよくあてはまる」まで、怒りの表出については「1：全くしない」から「5：とてもよくする」までの5段階で評定を求めた。

## 結果

まず、各尺度で想定されている下位概念に含まれる項目によって、各下位尺度の合成得点を算出した。ただし、共感性については $\alpha$ 係数を検討した結果、「相手を批判するときは、相手の立場を考えることができない」という視点取得の逆転項目と、「悩んでいる友達がいても、その悩みを分かち合うことができない」という他者指向的情緒反応の逆転項目を除いて算出した。各下位尺度得点の平均値、標準偏差、および $\alpha$ 係数については、Table 1に掲載した。なお、下位尺度得点は、合成得点を構成する項目数で除算して算出したものである。尖度、歪度、および $\alpha$ 係数の結果から、ここで算出された下位尺度得点を今後の分析に用いることとした。

第一に、主観的ウェルビーイングと共感性および怒り

の表出傾向との関連を検討するために、相関分析を実施した(Table 1参照)。その際、特性的な怒りがそれらの関連に与える影響を考慮し、0次相関係数と怒り特性を統制した偏相関係数を併せて算出した。その結果、主観的ウェルビーイングの下位概念については、友人関係満足感と友人関係における快感情経験との間に高い正の相関( $r = .634, p < .001$ )が、また、不快感情経験との間にも中程度の負の相関( $r = -.296, p < .001$ )がみられた。快感情経験と不快感情経験との間は無相関( $r = -.089, ns$ )であり、下位尺度間の独立性が確認された。

主観的ウェルビーイングと共感性との関連については、友人関係満足感と友人関係における快感情経験は、視点取得とも共感的な情緒反応とも $r = .286 \sim .453 (ps < .001)$ の関連を示したが、不快感情経験はいずれとも無相関( $r = -.035 \& .021, ns$ )であった。主観的ウェルビーイングと怒りの表出傾向との関連については、怒りの表出および制御傾向との関連はみられず、怒りの抑制傾向のみ友人関係満足感と快感情経験との間に負の相関(順に、 $r = -.308, p < .001; r = -.201, p = .001$ )が、不快感情経験との間に正の相関( $r = .283, p < .001$ )がみられた。

特性的な怒りを統制した偏相関係数との比較では、あまり大きな変化は認められないものの、統制していないときにはみられなかった友人関係における不快感情経験と怒りの制御傾向との有意な正の相関( $r = .101, ns \rightarrow r = .189, p = .002$ )がみられ、逆に、怒りの表出傾向との間にみられた関連( $r = .146, p = .017 \rightarrow r = .022, ns$ )はみられなくなった。

第二に、友人関係満足感と怒りの表出傾向の違いによって、共感性が異なるかどうかを検討するために、友人関係満足感と怒りの表出傾向の各下位尺度得点の中央値を算出し、その値を基にそれぞれの高群と低群を設定した。

Table 1. 主観的ウェルビーイング、共感性、怒りの特性および表出傾向との関連(0次相関\特性怒りを統制した偏相関)

	満足度	快感情	不快感情	視点取得	共感反応	表出	抑制	制御	<i>M</i>	<i>SD</i>	$\alpha$
<主観的ウェルビーイング>											
友人関係満足度		.634 **	-.280 **	.344 **	.452 **	.107 *	-.305 **	-.075	3.91	(.65)	.80
快感情経験	.634 **		-.083	.284 **	.424 **	.103 *	-.199 **	.038	3.93	(.74)	.87
不快感情経験	-.296 ***	-.089		.057	-.028	.022	.281 ***	.189 **	2.55	(.86)	.82
<共感性>											
視点取得	.356 **	.286 **	.021		.491 ***	.064	.018	.344 **	3.59	(.66)	.70
共感反応	.453 **	.425 **	-.035	.491 ***		.065	-.285 **	-.038	3.85	(.71)	.77
<怒り表出>											
表出	.009	.054	.146 *	-.057	.025		-.256 **	-.301 **	2.60	(.60)	.77
抑制	-.308 **	-.201 *	.283 **	.011	-.286 ***	-.172 **		.559 **	3.03	(.62)	.73
制御	-.029	.050	.101	.376 **	-.022	-.440 ***	.509 ***		3.19	(.71)	.83
<特性怒り>											
	-.116 *	-.041	.206 **	-.167 **	-.040	.631 ***	.042	-.352 **	2.68	(.66)	.84

\*\*  $p < .001$  \*  $p < .01$  \*  $p < .05$  \*  $< .10$

Table 2. 友人関係満足感と怒りの表出傾向が共感性に与える影響（上段：男性／下段：女性）

友人関係満足感	怒りの表出	満足感×表出	怒りの抑制	満足感×抑制	怒りの制御	満足感×制御
<共感性> <i>F</i> 値 : <i>df</i> = 1,109						
視点取得	8.725 **	0.000	0.447	0.767	0.012	10.169 **
共感反応	7.825 **	0.346	0.011	2.750	0.030	0.154
<i>F</i> 値 : <i>df</i> = 1,128						
視点取得	14.811 ***	0.110	0.139	0.090	4.577 *	12.017 ***
共感反応	24.691 ***	0.928	5.097 *	2.317	0.407	2.194

\*\* *p* < .001 \* *p* < .01 . \* *p* < .05

それを基に、共感性の各下位尺度得点に対して友人関係満足感(2)×各怒りの表出傾向(2)×性(2)の多変量分散分析を行なったところ、性の主効果が共感的な情緒反応 [ $F(1,237) = 16.154, p < .01$ ] で得られ、性とその他の要因との交互作用効果が有意ではなかったことから、男女別に行なった友人関係満足感(2)×各怒りの表出傾向(2)の2要因分散分析結果を報告する (Table 2 参照)。

男子学生に関しては、友人関係満足感と各怒りの表出傾向との交互作用効果はみられなかった。友人関係満足感の主効果が、視点取得 [ $F(1,109) = 8.725, p = .004$ ] でも共感的な情緒反応 [ $F(1,109) = 7.825, p = .006$ ] でも得られ、友人関係における満足感の高い者ほど共感性が高かった。また、怒りの制御傾向の主効果が、視点取得 [ $F(1,109) = 10.169, p = .002$ ] で得られ、怒りの制御傾向の高い者ほど視点取得能力が高かった。

女子学生に関しては、男子学生と同様に、怒りの制御傾向の主効果が、視点取得 [ $F(1,128) = 12.017, p = .001$ ] で得られ、こちらも怒りの制御傾向の高い者ほど視点取得能力が高かった。他方、男子学生にはみられなかった交互作用効果に関しては、視点取得について友人関係満足感と怒りの抑制傾向の交互作用 [ $F(1,128) = 4.577, p = .034$ ] に、共感的な情緒反応について友人関係満足感と怒りの表出傾向の交互作用 [ $F(1,128) = 5.097, p = .026$ ] に、それぞれ有意差が認められた。

友人関係満足感低群では、怒りを抑制する傾向の高い者ほど視点取得 [ $F(1,54) = 9.137, p = .004$ ] が高かったが、友人関係満足感高群では、怒りの抑制傾向の差による違いはみられなかった。また、友人関係満足感高群では、怒りを表出する傾向の低い者ほど共感的な情緒反応 [ $F(1,85) = 5.294, p = .024$ ] が高かったが、友人関係満足感低群では、怒りの表出傾向の差による違いはみられなかった。

## 考 察

本研究は、友人関係における主観的ウェルビーイング

に注目し、共感性および怒りの表出傾向との関連を明らかにすると共に、特性的な怒りがこれらの関連に及ぼす影響を検討することを目的として行なわれた。さらに、主観的ウェルビーイングの高さや怒りの表出傾向の違いが共感性に与える影響についても検討された。

主観的ウェルビーイングと共感性との関連については、友人関係満足感と友人関係における快感情経験は、視点取得とも共感的な情緒反応とも正の相関関係を示した。これは、社会的適応の観点から精神的健康の検討を進めることの有益性を支持する結果といえよう。主観的ウェルビーイングと怒りの表出傾向との関連については、怒りの抑制傾向と友人関係満足感の間に負の相関関係がみられ、友人関係においてより不快感情を経験していることが示された。これは、友人関係において怒りを経験することがあるあっても、それを我慢して内にためると精神的健康の維持によくないことを示唆しており、崔・新井(1998)の結果と一致する。

特性的な怒りがこれらの関連に及ぼす影響に関しては、特性的な怒りを統制した偏相関係数を算出して比較した。その結果、あまり大きな変化は認められなかったものの、統制していないときにはみられなかった友人関係における不快感情経験と怒りの制御傾向との有意な正の相関がみられ、逆に、怒りの表出傾向との間にみられた関連はみられなくなった。これは、「元来怒りっぽい性格である」という要因を除けば、人は友人関係において抱いた不快感情を、何とか静めたり表に出さないようにするものであり、また、不快な感情を多く経験すればするほど、周囲に対してそれをぶつけるわけでもないことなどを示唆する。快感情経験に比べて不快感情経験と友人関係満足感との関連が弱かった今回の結果なども考え合わせると、主観的ウェルビーイングにおける「快感情経験が多く、不快感情経験が少ないと」という情緒的側面の概念定義は、いささか単純化しすぎているのかもしれない。

友人関係満足感と怒りの表出傾向の違いが共感性に及ぼす影響に関しては、女子学生においてのみ交互作用効果が得られた。友人関係に満足している者でも、共感性

が低ければ自己の怒りを周囲へ向ける傾向があること、逆に、友人関係にあまり満足していない者のうち、共感性が高いと自己の怒りを内にためてしまう傾向があることなどが見出された。これは、自己の不快感情を調整せずに友人にぶつけたり、友人の不快感情について気にとめなくとも、友人関係に満足している者の存在や、逆に、共感性が高いがゆえに、友人関係において自己の不快感情の開示を控えてしまい、結果的に満足な友人関係を築けていない者の存在などをうかがわせる結果である。これは、女子青年に限ったものであるが、一般的に女性の方が共感性も主観的ウェルビーイングも高いとの指摘 (Davis, 1994; Diener, Suh, Lucas, & Smith, 1999 参照) や、日常生活において快感情も不快感情も男性より多く経験していること (Feist, Bodner, Jacobs, Miles, & Tan, 1995; Diener, 2000 参照) などから、さらに女子青年に注目した検討を進めることが有益となりうるかもしれない。

### 引用文献

- American Psychiatric Association 1994 *Diagnostic and statistical manual of mental disorders (4<sup>th</sup> edn.): DSM-IV*. Washington, DC: Author.
- 崔 京姫・新井邦二郎 1998 ネガティブな感情表出の制御と友人関係の満足感および精神的健康との関係 教育心理学研究, 46, 432-441.
- Davis, M. H. 1980 A multidimensional approach to individual differences in empathy. *JSAS Catalog of Selected Documents in Psychology*, 10, 85.
- Davis, M. H. 1983 Measuring individual differences in empathy: Evidence for a multidimensional approach. *Journal of Personality and Social Psychology*, 44, 113-126.
- Davis, M. H. 1994 *Empathy: A social psychological approach*. (菊池章夫訳 1999 共感の社会心理学: 人間関係の基礎 川島書店)
- 出口保行・斎藤耕二 1990 共感性尺度の因子分析的研究 東京学芸大学紀要: 1 部門, 41, 183-196.
- Diener, E. 1984 Subjective well-being. *Psychological Bulletin*, 95, 542-575.
- Diener, E. 2000 Subjective well-being: The science of happiness and a proposal for a national index. *American Psychologist*, 55, 34-43.
- Diener, E., Suh, E. M., Lucas, R. E., & Smith, H. L. 1999 Subjective well-being: Three decades of progress. *Psychological Bulletin*, 125, 276-302.
- Eisenberg, N., & Miller, P. A. 1987 The relation of empathy to prosocial and related behaviors. *Psychological Bulletin*, 101, 91-119.
- Eisenberg, N., & Strayer, J. (Eds.) 1987 *Empathy and its development*. New York: Cambridge University Press.
- Feist, G. J., Bodner, T. E., Jacobs, J. F., Miles, M., & Tan, V. 1995 Integrating top-down and Bottom-up structural models of subjective well-being: A longitudinal investigation. *Journal of Personality and Social Psychology*, 68, 138-150.
- Hong, S-M., & Giannakopoulos, E. 1994 The relationship of satisfaction with life to personality characteristics. *Journal of Psychology*, 128, 547-558.
- 伊藤裕子・相良順子・池田政子・川浦康至 2003 主観的幸福感尺度の作成と信頼性・妥当性の検討 心理学研究, 74, 276-281.
- 木野和代・鈴木有美・速水敏彦 2000 友人の不快感情調整に関わる要因の検討－女子青年を対象に－ 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(心理発達科学), 47, 59-68.
- Mahon, N. E., Yarcheski, A., & Yarcheski, T. J. 2000 Positive and negative outcomes of anger in early adolescents. *Research in Nursing and Health*, 23, 17-24.
- 松井 豊 1990 友人関係の機能 斎藤耕二・菊池章夫(編著) 社会化の心理学ハンドブック 川島書店 (pp. 283-296)
- Miller, P. A., & Eisenberg, N. 1988 The relation of empathy to aggressive and externalizing/antisocial behavior. *Psychological Bulletin*, 103, 324-344.
- 根建由美子・田上不二夫 1995 主観的幸福感に関する展望 カウンセリング研究, 28, 203-211.
- 岡田 努 1995 現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察 教育心理学研究, 43, 354-363.
- 小塩真司 1998 青年の自己愛傾向と自尊感情、友人関係のあり方との関連 教育心理学研究, 46, 280-290.
- 小塩真司 2002 自己愛傾向によって青年を分類する試み－対人関係と適応、友人によるイメージ評定からみた特徴－ 教育心理学研究, 50, 261-270.

## 現代青年の友人関係における主観的ウェルビーイング

- Pennebaker, J. W. (Ed.) 1995 *Emotion, disclosure, & health.* Washington DC: American Psychological Association.
- Salovey, P., & Mayer, J. D. 1990 Emotional intelligence. *Imagination, Cognition, and Personality*, 9, 185-211.
- Seligman, M. E. P., & Csikzentmihalyi, M. 2000 Positive psychology: An introduction. *American Psychologist*, 55, 5-14.
- 清水健司・海塚敏郎 2002 青年期における対人恐怖心性と自己愛傾向の関連 教育心理学研究, 50, 54-64.
- 鈴木有美 2002 自尊感情と主観的ウェルビーイングからみた大学生の精神的健康－共感性およびストレス対処との関連－ 名古屋大学大学院教育発達科学研究所紀要（心理発達科学）, 49, 145-155.
- 鈴木 平・春木 豊 1994 怒りと循環器系疾患の関連性の検討 健康心理学研究, 7, 1-13.
- 鈴木有美・木野和代・出口智子・遠山孝司・出口拓彦・伊田勝憲・大谷福子・谷口ゆき・野田勝子 2000 多次元共感性尺度作成の試み 名古屋大学大学院教育発達科学研究所紀要（心理発達科学）, 47, 269-279.
- 登張真稟 2003 青年期の共感性の発達：多次元的視点による検討 発達心理学研究, 14, 136-148.
- 藤南佳世・園田明人・大野 裕 1995 主観的健康感尺度（SUBI）日本語版の作成と、信頼性、妥当性の検討 健康心理学研究, 8, 12-19.
- Wilson, W. 1967 Correlates of avowed happiness. *Psychological Bulletin*, 67, 294-306.

(2004年9月30日 受稿)

## ABSTRACT

Adolescents' subjective well-being in their friendships:  
Its relationships with empathy and anger

Yumi SUZUKI

A self-report questionnaire was administered to 288 undergraduates to examine the relationship of life satisfaction and recent emotional experience in their friendships, as the indices of positive mental health, with trait empathy, trait anger, and anger expression styles. Results of correlational analyses indicated that both cognitive empathy and affective empathy related positively to their subjective well-being. Anger expression styles, on the other hand, related differently to their subjective well-being; the anger-in expression style negatively related to their subjective well-being; when trait anger was partialled out, correlation between negative affective experience and anger-control expression style increased, while correlation between negative affective experience and anger-out expression style decreased. In addition, findings in a MANOVA revealed among female students that those with low empathy tended to take anger-out expression style but satisfied with their friendships, and that those with high empathy were likely to take anger-in expression style and not satisfied with their friendships.

Key words: subjective well-being, life satisfaction, emotion, empathy, friendship